

中日経済技術合作プラットフォームの共同構築事業に関する協 議書締結調印式報告

2015年5月1日

中国科学院北京国家技術転移中心、中関村社会組織聯合会、中国高科技産業化研究会国際合作部、《高科技与産業化》雑誌の4者は、日本の日中文化経済交流発展基金会と中日経済技術合作プラットフォームを共同で構築することで合意し、2015年4月16日に北京市海淀区中関村で協議書契約の調印式を行なった。

調印式典には、中国側から楊柏齡中国科学院元副所長 《高科技与産業化》雑誌主編、王利文中国太平洋経済合作全国委員会工商委員会副主席、景学成財務宏観組組長、康哲秀中国高科技産業化研究会副秘書長、劉慶蓮中国科学院北京国家技術転移中心主任、謝薇中関村組織聯合会副秘書長、馬珉《高科技与産業化》雑誌執行主編、王文越《高科技与産業化》雑誌編集部主任・中日経済技術合作平台秘書長、王義彭科学院北京国家技術転移中心国際合作区区主管・中日経済技術合作平台副秘書長、李偉科学院北京国家技術転移中心国際合作区区主管・中日経済技術合作平台副秘書長の各氏が出席した。また、オブザーバーとして、喬方紅山東省徳州市経済合作局局長・徳州市發展与改革委員会副主任ら徳州市の関係者や周霞上海中研科技諮詢服務有限公司総経理助理、黄玉枝江蘇省射陽数控機械産業園董事長らが同席した。

日本側からは三浦一志日中文化経済交流発展基金会理事長、篠崎晃株式会社国際産業連携センター取締役副社長、木津貴日中文化経済交流発展基金会理事長補佐、善養寺幸子日中文化経済交流発展基金会理事長補佐、松下丹恵日中文化経済交流発展基金会理事長補佐・株式会社国際産業連携センター顧問が列席した。

調印式典は4月16日午後14時から中関村鼎好ビルA座18階の中国科学院国際技術合作区で行なわれた。

調印式の発言要旨は以下のとおりである。

1. 司会

王文越（中日経済技術合作プラットフォーム秘書長）



4月の中国は春の気配に溢れ、美しい花々が咲き乱れて活気が漲っております。この美しい日に日中文化経済交流発展基金会理事長三浦一志様はじめ、皆様をお迎えすることができて、私はたいへん光栄です。

昨年12月に中国太平洋経済合作全国委員会商工委員会の招聘により基金会のみなさまが訪中され、双方の皆様がグローバル化の協力について検討し、覚え書きを交わして、連絡委員会を発足しました。

これを受けて、今回、中国側では科学院北京国家技術移転センターと高科技産業化研究会など、4つの組織が参加して、中日間の技術交流と技術移転事業を担う中日経済技術合作プラットフォームを運営し、日本との国際経済技術交流を通じて国内の産業・教育における幅広い革新的な事業展開を支援していきます。

本日、中日経済技術合作プラットフォームの調印式を行い、中日技術移転事業を新しく展開するにあたって、私は感謝と歓迎の御挨拶を申し上げます。

中国と日本の相互の協力により、日本からの先進的技術を中国の革新的企業と結びつけ、持続的な発展と世界経済の発展を実現し、この中日経済技術合作プラットフォームの拡大により、共同研究、プロジェクト、産業ファンドを設立し、幅広い分野で産業と技術の高度化につながる活躍ができると期待しております。

ご静聴有り難うございました。

次に、参加される皆様を歓迎申し上げ、日本からの来賓の皆様をご紹介します。
(以下省略)

2. 楊柏齡（中国科学院元副院長、《高科技与産業化》雑誌主編）



日本の皆様、ご参加の皆様、ありがとうございます。中日両国が一致することは双方の利益となります。中国市場は大きく、日本の皆様は中国により新たな戦力を得ることと存じます。

中国は一日も早い発展を成し遂げなければならず、そのために特に中国の中小企業は日本の先進的技術を求めております。そして、こうした中日経済技術合作プラットフォームを求めています。日本の革新的・先進的な技術を得て、中国の市場は大きなチャンスが生まれ、両国の有効な技術交流の場となるでしょう。

私はプラットフォームの運営者として、様々な考えがあり、これを通して、日中が協力して実績を上げ、中日両国の友情、発展、生活の質の向上を願うものであります。

3. 三浦一志（日中文化經濟交流發展基金会理事長）





本日は日本と中国の間の技術移転と産業交流のプラットフォームを日中共同で構築する
合作事業契約の調印式にご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

このたびの中日経済技術合作プラットフォーム事業は、私ども日中文化経済交流発展基
金会と中国科学院北京国家技術転移中心、並びに中関村社会組織聯合会、中国高科技産業
化研究会国際合作部、《高科技与産業化》雑誌が連携して、日本の先進技術を中国に紹介

し、日中間の技術交流と産業連携を促進するプラットフォームを共同で構築し、運営する取り組みです。

私どもは王道函先生のご支援ご指導を受けて発足した日中文化経済交流組織ですが、グローバル経済時代に日中両国が共に手を携えて、それぞれの産業資源、人的資源などを投入して技術革新（イノベーション）を促進し、環境エネルギー問題をはじめ、医療、福祉、社会インフラ構築など、さまざまな社会的な課題の解決に貢献していきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の中日経済技術合作プラットフォーム事業にご尽力を賜った中国太平洋経済合作全国委員会商工委員会副主席の王利文先生をはじめ、中国と日本の関係者皆々様に御礼申し上げます。

「隗より始めよ」と言いますが、本日は日中経済技術合作のビギン・ザ・ビギン、始まりの始まりです。共に連携、連帯して技術革新と経済変革のイノベーションを加速していきましょう。

王利文先生とは20年の交流があり、今回のような機会をつくって下さったことに感謝の言葉を申し上げると同時に、感謝状を差し上げたいと思います。尊敬する王先生の掛け橋のもとで、良い関係が長い間、続くことを願っております。



4. 康哲秀（中国高科技産業化研究会副秘書長）



三浦様ほか、会場の皆様に御挨拶申し上げます。今日、ここに中日経済技術合作プラットフォームがスタートしますが、中国高科技産業化研究会を代表して今後の順調な発展をお祈り致します。

私どもは中日経済技術合作プラットフォームを通して、経済と技術の両面から発展を目指します。学術面でも向上させて人材育成も行います。業務チャンネルとして、それぞれの連携を強化し、社会的サービス事業の向上も目指します。

異なる規模の企業との連携強化により、専門家や研究員と結びつきを強め、国際発展につなげます。今年、そのための研究会が開催されました。中日経済技術合作プラットフォームに参加することで、研究会の発展に貢献することとなります。

われわれは中日経済技術合作プラットフォームを支持し、研究、教育、産業支援に力を注ぎます。国際技術移転、日中双方の経済貿易では調和機能を発揮します。

同時に、われわれもこのプラットフォームにより、科学技術発展の新しい方法を探求し、他人の長所を取り入れ、自分の短所を補います。

全国民のイノベーション、社会革新を行い、特に中小企業の健全な発展を目指します。

最後に、皆様方の益々のご発展をお祈りいたします。

5. 景学成（中央財務宏観組組長）



日本代表団の皆様、はるばるお越し頂きありがとうございます。私はこの場でスピーチするつもりはなかったのですが、ご指名により御挨拶をさせていただきます。

今回の三浦様のご来訪で私はある名前を思い出しました。それは「プラットフォーム」という名前です。

私は今の自分がシンクタンクの長という肩書きをもっておりますが、いうまでもなく、中国太平洋経済合作全国委員会商工委員会は大きなプラットフォームであり、私は同委員会の王先生と仕事をすることができて大変喜ばしく感じております。

今回、三浦様のご支援により中日経済技術合作プラットフォームの設立となり、一緒に仕事ができることを光栄に思います。

今は二つのプラットフォームの連携により、中日経済技術合作プラットフォームの名前に相応しいものとする。われわれは公社基金をつくっておりますが、今回発足するプラットフォームとつながって一緒に仕事をしていこうと思っております。

先程、三浦様がおっしゃった「先進的な日本の技術を中国へ」という言葉を喜ばしく感じております。中国と日本が協力することで、中国のみならずさらに大きな可能性が広がることを考えています。

皆様の参画に御礼申し上げます。アジアインフラ投資銀行（A I I B）など、何かご不

明な点があれば、ぜひ私にお問い合わせ下さい。アジアインフラ投資銀行とシルクロード資金に関しては私に連絡下さい。

そして今、私が言いたいことは、感謝です。友情の花を育て実ることができました。王先生と三浦様が育てた結果で、プラットフォームの花です。私も精一杯力を尽くしたいと考えております。私は今、特に資金、プロジェクト、技術という3つを考えています。A I I Bに関しては、もし、関心があれば言って下さい。

今日はありがとうございました。

三浦氏) 今、景学成先生が言ったことに関して、われわれは深く理解しております。短い言葉の中でその意味を把握しました。これから王先生を通して、提案をしたいと思えます。これからも宜しく私どもを育てて下さい。

6. 謝薇 (中関村社会組織聯合会副秘書長)



三浦様、ご来場の皆様、こんにちわ。中関村社会組織聯合会の代表として、この場に呼んでいただき感謝いたします。

中関村社会組織聯合会は2013年に発足し、今、パートナーは2万社以上となりました。聯合会は絶えずイノベーションを行っています。新しいビジネス環境を提供しており、

技術移転と知的財産については重要な部分と考えています。

昨年、知財委員会を発足しました。それにより、技術移転の分野で改善を図り、技術交流をより活発にしていきたいと思います。知財産業に関する問題があれば、どうぞ私どもにご相談下さい。

联合会は積極的に中日経済技術合作プラットフォームを発展させ、中国によりよい技術を呼ぶことに注力していきます。ご静聴ありがとうございました。

三浦氏) この点は非常に重要な点であります。大手財閥グループの電機メーカーは特許をたくさんもっているが、中国とどう連携するかが課題であるということでした。われわれは知的財産面でミーティングを行います。

日本のリーダーのところに特許関係の専門の方がたくさんいますので、中国との特許の連携をどう構築するか。現在それが大きな課題となっており、より強く連携していきたいと思います。

7. 劉慶蓮（科学院北京国家技術轉移中心主任）



中国4団体および日本からの皆様を歓迎いたします。

われわれは科学技術移転の機能をもち、技術専門家の支援を行います。联合会などの力を結合したプラットフォームの発展に力を注ぎます。

今回の協力は革新的かつ高いレベルの連携であることから、中日経済技術合作プラットフォームの未来について、私は非常に大きな自信を持っています。

この場を借りて北京事務所の皆様に感謝申し上げます。また、王先生、今日まで長い間、ご助力を賜り、ありがとうございます。われわれも持てる力を発揮して中日経済技術合作プラットフォームの建設に力を入れたいと思います。

私は「始め良ければ終わりよし」と考えています。すべての協力者を代表して中日経済技術合作プラットフォームの発展をお祈り申し上げます。

8. プラットフォーム運営方針説明

篠崎晃(株)国際産業連携センター副社長

今、われわれが考えている日本側のプラットフォームの運営方針と推進体制について、ご説明致します。

図の通り、中日経済技術合作プラットフォームがあり、日本側は基金会の専門組織として国際産業連携センターというものを設立し、ここが全体のプロジェクトの取りまとめを行います。

日本側の案件の発掘調査、中国側とのすりあわせ、交渉をこのセンターが行います。その基に、コンサルティング会社、商社、金融機関などのコアパートナーを組織していきます。

さらに実際のプロジェクト案件を技術評価するための技術評価委員会を組織し、さまざまな技術分野の専門家があつまって評価し、中国側に提案します。

そのための支援機関として、大学のTLO（技術移転機関）などの組織と連携していきます。日本には産業系の学会がたくさん存在し、例えば東京工業大学のOBの皆様が参加している蔵前工業会などがあり、こうした組織とも連携していきます。

右側の図は政府系の研究機関のいくつかの例です。環境系、科学技術系、産業系などの政府系研究機関とも連携していきます。

政府機関だけでなく、東京都や大阪市など、地方自治体の研究機関とも連携していきます。さらに、産業別、業種別に組織されています工業会などの産業団体とも連携します。

今回いくつかの技術案件をもってきており、この後、二人のメンバーにそのポイントをご紹介させていただきます。

今日が始まりです。宜しくお願いします。

9. プロジェクト案件紹介

善養寺幸子日中文化経済交流発展基金会理事長補佐（エコエナジーラボ代表取締役）



今回、連携したい提案事業「エコジャパンカップ」のプロデューサーを勤めています。

エコカップジャパンは日本で中小企業の環境ビジネスを官民協働で行うプラットフォームの事業です。

日本は9割が中小企業です。すぐれた技術がたくさんありますが、分散していて見つからない現状があります。そうした芽を見つけだして官民で育てようというのが、この環境ビジネスコンテストである「エコジャパンカップ」です。

2005年の万博『愛・地球博覧会』がスタートで、06年に事業としてスタートしました。「経済と環境は対立しない、環境ビジネスにより経済が発展する」という意図で始められました。

今年で開催10年になります。特徴的なのはカルチャー、ライフスタイルを含むすべてをビジネスととらえている点で、そうした分野でもコンテストを行います。

官民連携協働事業として行っていますが、中央官庁の国土交通省、総務省などとともに主催してまいりました。

今年10周年を迎えてより地方に力を入れるため、地方選考会を実施します。地方の情報を知っている地方銀行、行政（都道府県）、大学、地元新聞社などと連携します。

もともとエコジャパンカップは官民協働事業として行って参りました。そこで培ったノウハウを利用して各県に支援チームを設立する予定です。地方メディアと銀行は密な関係があり、その関係を基に事業を展開します。

今までも全国から情報を集めてきましたが、そうした情報を利用するために情報データベースを基に新たなシステムを作ろうと考えています。それにより、海外や国内のビジネスオファーを地域拠点に依頼できますし、地域拠点からプラットフォームの中でパートナーを捜すことも可能となるでしょう。デジタルデータだけでなく、人的交流も積極的に実施する予定です。

この事業は日本では珍しく、日本の各県、全国規模で参加してくれた唯一のコンテストでもあります。それ故、今回のような体制を築くことが可能となりました。すでに実行委員会が動いております。大学や委員、特徴的な日本の官の研究所との連携があります。JICAなどの団体とも組んでおり、すでに中小企業支援としてコンサルも実施し、ベトナムでの実証実験を行いました。

今回、この日中のプラットフォームに関してはメンバーも期待しております。中小企業の密接な関係により新しいビジネスがスタートするよう、期待しております。

10. プロジェクト案件説明

木津貴 日中文化経済交流発展基金会理事長補佐



これから北京の空に星が見えるように、川に鮭が遡上するよという命題をもって、私どもの技術をご紹介します。環境というと、大気汚染と水処理の二つがありますが、今回は主に大気汚染を中心にご説明いたします。

北京の大気汚染は①自動車の排気ガス、②家庭・ビルの排ガス、③発電所・工場の排ガスが大きな要素と聞いています。発電所・工場の排気ガス処理についてお話しします。

この図の通り、今回ご紹介する排煙脱硫装置の画期的な点は液注式吸収塔を新規開発した点にあります。下の図の通り、左からボイラー、電気集塵機という経路をたどった排ガスを吸収塔に送り込んで脱硫します。

特徴は3つあり、一つは99%の高い脱硫率です。二つ目は絵にあるようなシンプルな構造にした点で、メンテナンスが容易です。三つ目はスケールフリー（ヨゴレがつかない）である点にあります。塔内部のスプレーノズルから吹き出される洗浄水により自己洗浄することが可能です。

次ページは99%脱硫率を誇る技術のポイントです。左側の下から硫黄分を含んだ排ガスが吹き出されます。その時、同時に上側に吹き出される吸収液に巻き込まれます。上に向かった吸収液と落ちてくる吸収液ふたつによって洗浄効果が発揮できます。

われわれが提供する範囲ですが、この図のように、一番の電気集塵機、二番目に赤く囲われている吸収塔、そして運転システム、分析モニタリングシステム、運転指導です。設計から稼働まで責任を持ってご提供します。以上が排煙脱硫装置の説明です。

今日は水処理については割愛しますが、日本の東京の真ん中に神田川があります。神田川は今から二〇年前まではヘドロで人が近くに寄れない程汚染された川でした。これが今では次のページにある右の写真の通り、美しい川となり、魚が戻り、憩いの川となっております。ぜひ、北京の川も同じようになるよう願っております。

篠崎) 二つのプロジェクトの説明を致しましたが、それ以外にもたくさんご紹介したい事業がありますが、今回は代表的な二つをご紹介することとなりました。宜しく願います。

<質疑応答>

質問者：楊氏) 先程、紹介頂いた水処理技術ですが、出資はどちらからですか？大きなプロジェクトを実施すると資金が多くかかりますか？

三浦氏) 今回は代表例として、こういう技術があるということを2つほど紹介しました。中国の皆様がこうした技術について精査していただき、その上で中国が導入したいということになれば、詳細を詰めて進めていくということです。

質問者：楊氏) 日本では水汚染の神田川がキレイになったとありますが、その資金はどこからきましたか？

三浦氏・木津氏) 日本に帰国した後、きちんとレポートしてお答えします。政府・官・民という大きな話なので、きちんとレポートします。複合的な汚染処理なので、多岐に渡って問題を解決しています。

質問者：楊氏) われわれも以前、水処理に取り組んできましたが、特に資金の面では難しい課題でした。もし、これが複合的ないろいろな分野が関わって成功したものであれば、そのレポートがあれば大変嬉しいです。

三浦氏) レポートします。中国の汚染された水処理について、いくつもの日本企業がチャレンジして成功しなかったと聞いています。これは、それらのものとは異なる全く新しい汚染処理技術です。

木津氏) われわれも水質処理は難しい問題だと認識しています。要因が3つあり、汚染源

が多く散在していること。ご承知の通り、上流側で鉱山・工場で汚染水が排出されています。中流では農業用水・生活排水が川に流れ込んでいます。多種多様の重金属が含まれた汚染水なのです。

その結果、地下水まで汚染が進んでいると見られています。従来は重金属が別々のシステムでなければ除去できなかったのですが、このシステムはそうではありません。このフェライト処理法は、多く含まれた重金属を一括で処理できるシステムとして開発されました。簡単な資料を差し上げますのでご参照下さい。

11. 中方プラットフォーム運営方針説明

王義彭北京国家技術転移中心国際技術転移主管



中国側のプラットフォーム運営方針と仕事の内容についてご説明します。

3つの点からご説明致します。中国科学技術院についてですが、この図をご覧ください。プロジェクトの育成などを行います。

今、私たちが持っている協力機構は次の通りです、英国オックスフォード大学、ドイツ、日本、シンガポール、ロシアなどのほか、アジアビジネス連携センター、中仏創業孵化園などがあります。

技術チャネルは、今回の中日経済技術合作プラットフォームを含め、英国・日本・フランス・ドイツ・シンガポール等との技術移転プラットフォームがあります。

また、北京にあるニュージーランド、フランス、ロシア、英国、日本の大使館やイタリア企業・学術社団などの協力を得ています。この図の通り、北京国家技術転移中心は2013年に発足しました。

協力機関の数は年々増えており、13年には12社だったのが、今年は52社に増えています。提携に関しては、図の3つのような協力会社があります。協力形式については、技術情報提供、プロジェクトの発展などがあります。私たちが携わっている核心業務は、技術研究及び人材開発、国外技術導入と国外プロジェクト創出、創業孵化機構の育成、プロジェクトの審査と認定、国及び地方政府のトレーニングなどがあります。

私たちの活動に関しての写真をいくつか紹介します。

実際、取り組んでいく図式はこの通りです。

ドイツ国際協力検討会の開催。これは三浦様と関係した初めての写真です。天津・北京以外の場所で行ったもので、商談の写真です。

中日経済技術合作プラットフォームでは、中国の活力ある企業と日本の技術を結びつけ、双方の継続的な発展を目指すものです。その長所は中国の科学技術、人材、産業、資源を結集できる点です。相互の科学技術を結集し、技術革新を行い、日中技術移転の効率的なメカニズムを創出し、革新型の中小企業に提供して革新的な事業を実現させることが可能になります。

中国から提案されたものを、日本の技術に照らし合わせ、相談します。日本側から技術をもって、中国側でも厳しい審査を行います。プラットフォームの業務は、中方の企業需要と日方の先進技術の提供条件をつき合わせて、プロジェクト案件を提起する項目選定、評価、移転の3段階で行われます。

プラットフォームの紹介は、中国で注目されている SNS サイトの WeChat (ウィチャット) や北京中心網のネット、《高科技与産業化》雑誌などでの情報発信を行い、広く宣伝していきます。

今後は、宣伝を行うことで、他の国内研究組織が参加する予定です。シンガポールとドイツの視察団を受け入れ、見学対象は企業です。主に新エネルギー、省エネ、インテリジェント設備などです。シンガポールなどとも連携を行います。

三浦氏) 今、王さんが話したことに大変興味があります。大きな企業は日本の技術が欲しいということになれば力があるので、自分でいろいろ選べます。中国の中堅中小企業は新しい技術が欲しいが、日本のどこの企業と組むのがよいか解らないケースがほとんどです。

われわれは日本の中小企業と多方面で連携し、中小企業の技術情報と技術リソースを紹介していきたいと考えています。

王氏) プラットフォームのチームを使って、具体的な技術の要求を調べることができるで

しょう。定期的に協議をして、先程お話ししたお話については雑誌に掲載していただけたらもっと理解が深まるでしょう。

三浦氏) 今後、そうした点をもっと深めて行きましょう。

この後、三浦一志日中文化経済交流発展基金会理事長と劉慶蓮中国科学院北京国家技術轉移中心主任が協議書にサインをし、調印式は終了した。





